街のオアシス 再発見 第4回

眼下に海が広がる 小樽公園（小樽市）

森林インストラクター
小沢　信行（おざわ　のぶゆき）

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

街や港、さらには石狩湾を一望できる小樽公園。地元住民が1893年、北海道庁から「共同遊園地」として払い下げを受けたのが始まりです。

起伏に富んだ土地に荷馬車組合が無報酬で土砂を運び込み、グラウンドを造成。かつては小学校の連合運動会や市民運動会が開かれ、夏の一大イベント、潮（うしお）まつりのメーン会場にもなりました。

周辺の傾斜地は植樹を繰り返し、サクラやツツジの名所となっています。

石狩湾を望むことができる見晴台

花も実も目立つクリ

夏以降、公園内で存在を誇示するのがクリです。それまでは他の木々と同じく緑一色ですが、７月になると白く細長い花をたくさん付け、遠くからでも一目で分かるようになります。

白い尾状の垂れた花が雄花（おばな）です。雌花（めばな）は尾状の基部に小さく咲いているので目立ちません。

しかし受粉後、雄花は枯れ落ち、雌花だけが大きく成長すると、長いとげが密生する球形のいが（殻斗（かくと））に変身します。いがの中にはふつう実が３個あり、熟すといがが裂け、褐色の実が顔をのぞかせます。

そびえ立つクリの木

実りの秋、落ちたクリを拾うのも楽しみの一つです。国内の縄文遺跡からはクリの実が出土しており、はるか昔から山の幸として重宝されていたことが分かります。

花も実もない時期にクリを見分けるポイントは葉です。細長い葉のふちにはとげ状の突起がたくさんついています。でも柔らかいので痛くはありません。

幹は堅くて腐りにくいため、鉄道の枕木（まくらぎ）として使われてきました。

自生の北限は石狩平野です。空知管内の栗山町、岩見沢市栗沢という栗の付く地名は、いずれもアイヌ語のクリの多い所という意味に由来しています。

小樽市北部の手宮公園には約230本のクリ林があり、自然林の北限とされています。小樽公園に散在する高木（こうぼく）のクリも同じような生命力を感じさせます。

いがに包まれ成長するクリの実

清涼感漂うシラカバ林

公園の南斜面にはシラカバ林があります。かつてはトドマツが植えられていましたが、乾燥地のためよく育ちませんでした。森林伐採や火災などで明るく開けた土地に真っ先に生えるシラカバが、荒地に適していると選ばれたのです。

白さが映えるシラカバ林

60年前の1964年、小樽ロータリークラブが創立30周年の記念事業として、隣接する緑小学校（現山の手小学校）の児童も参加し、1,500本の苗木を植樹しました。1968年にはシラカバが「小樽の木」に選定されています。

北国を象徴する樹木で、白色の樹皮が特徴。白くなるのはベチュリンという物質が含まれているためです。樹皮は薄い紙状で横にはがれます。燃えやすく、たいまつとしても使われてきました。

枝が落ちた幹の跡にはへの字のような印が残ります。人の目にも似ており、樹上からたくさんの目に見られているような錯覚を抱かせます。

春の開花時には、細く短い雌花が枝から直立し、太く長い雄花は垂れ下がります。近年はその雄花から出る花粉が飛散し、花粉アレルギーに悩まされる人もいます。

一方、春先は根から水を勢いよく吸い上げるため、幹から樹液を採取することができます。マグネシウム、亜鉛、リンなどが含まれ、道内では飲料水や化粧品などに有効利用されています。

公園内のシラカバ林は白い高木が林立し、夏場は清涼感を与えてくれます。早朝や夕方、散策するには絶好のコースです。

シラカバの花。垂れているのが雄花、細く直立しているのが雌花

2番人気の歌が碑に

公園入り口の左側高台にあるのが石川啄木（いしかわたくぼく）の歌碑です。啄木は記者として小樽日報の創刊に加わるため1907年９月、札幌の新聞社を辞め小樽に転居します。しかし、長くは続かず、会社の内紛で12月には退社します。

啄木の小樽滞在を歌碑にして後世に伝えるため1948年、啄木歌碑建設期成会が発足。1950年には、期成会が提出した歌碑建設の請願が市議会で採択されます。

また、歌碑候補として８首を選び、市民からの投票を募りました。その結果、最も多かったのは「かなしきは小樽の町よ　歌ふことなき人人の　声の荒さよ」でした。しかし、この歌は市民感情になじまないと市議会が助成を認めませんでした。

やむを得ず1951年、再審議した末、２番目に投票の多かった「こころよく　我にはたらく仕事あれ　それを仕遂げて死なむと思ふ」に決定します。市の助成と一般の寄付をもとに建てられた歌碑の除幕式は同年11月３日に行われました。

歌は仙台石に刻み、それを地元の自然石にはめ込みました。文字は啄木の書簡を模して書かれています。当初、レリーフ像の設置も検討されましたが、金属盗難が多いことから見送られました。

市民の支持が一番多かった歌「かなしきは……」の碑は、それから29年後の1980年、経済人の集いであるおたる親潮会が創立50周年を記念して水天宮に建立しました。

さらに2005年には、小樽啄木会と啄木歌碑建立期成会が市内第３の啄木歌碑をＪＲ小樽駅前の三角市場入り口に建てます。そこは啄木の義兄が住んでいた駅長官舎跡地で、啄木がかつて泊った場所です。

碑には「子を負ひて　雪の吹き入る停車場に　われ見送りし妻の眉かな」と記されています。新しい職を求め小樽から釧路へ旅立つ啄木を見送る妻節子の姿を詠んだ歌です。

公園の歌碑は70年以上が経過、歌自体が小樽を連想しないこともあり、忘れられがちな存在となっています。

市内最初の石川啄木歌碑

姿を消した戦前の銅像

北垣国道の銅像（絵はがき）

戦前、公園内には銅像が相次いで建てられました。最も大きかったのは北垣国道像です。北垣は京都府知事時代の1890年、琵琶湖から京都に水を引く琵琶湖疏水を完成させ、京都の近代化に貢献したことで知られています。

小樽とのかかわりはそれ以前からありました。開拓使に勤めていた北垣と榎本武揚（後の外務大臣）は1872年、小樽の将来性を見込んで開拓使に土地の払い下げを申請し、稲穂、富岡一帯の未開地20万坪（66㌶）を手に入れます。その後、土地は10万坪となりますが、引き合いが多くなったため、札幌を去った２人は管理業務を行う北辰社を設立し、市街地開発に努めました。

また、北垣は1892年、北海道庁長官に就任、小樽の港湾整備や小樽―函館間の鉄道敷設に尽力します。

こうした努力をたたえようと、北垣と縁のあった地元経済人らが中心となり、公園内の嵐山（現裁判所）に立像を建設します。像は高さ3.3㍍、その下の礎柱を含めると全体で7.2㍍にもなります。各界の名士が出席した除幕式は1919年６月９日でした。

次いで東山（現見晴台）に建てられたのが広井勇の胸像です。広井は1897年、小樽築港事務所長に就き、日本初のコンクリート製外洋防波堤となる北防波堤を建設しました。1899年には東京帝国大学（現東京大学）教授に就任します。学者仲間や教え子らが銅像建設を呼び掛け1929年10月12日、除幕式が実施されました。

広井の下で学んだ伊藤長右衛門は1909年小樽築港事務所長となり、世界初のケーソン進水方式を採用し南防波堤を完成させます。北海道庁の関係者らが胸像建設に努め1941年７月20日、日本庭園で除幕式が行われました。

しかし、３体の銅像は戦時中の金属回収令により、撤去されます。広井と伊藤の像は1953年、市が同じ場所に再建しますが、北垣の像が復元されることはありませんでした。

その後、広井と伊藤の像はゆかりのある港湾地区に移すべきだという声が高まり1999年、小樽運河北端の運河公園に移設されました。この師弟像は建設後、そろって撤去、再建、移転という珍しい運命をたどることになります。

戦前からの銅像は消え、唯一あるのは実業家、藤山要吉の胸像です。藤山は私費で公会堂を建て市に寄贈した人物です。功績を顕彰するため市費と民間の寄付で1958年６月30日、公会堂前に建てられました。

公会堂は1961年、市民会館建設のため、向かい側の現在地に移設されましたが、胸像は市民会館前に残っています。

市民会館前庭の藤山要吉像